

ボランティア活動を通しての主体的な 地域社会参加の試み

—留学生による病院でのボランティア活動を事例として—

松 本 久美子

<キーワード> 多文化共生、留学生、ボランティア、主体性、地域社会参加、コミュニ
ティー・サービス

はじめに

近年留学生や外国人労働者等の増加とともに、多文化共生社会形成に向けての試行錯誤が始まっている。その流れの一つとして、留学生に関する支援活動及び交流活動が活発化している。しかし、それらの活動は、いわゆる「外国人」である留学生は基本的に支援される側であることを前提にしているものが大半である。年数が経ち、日本語が上達しても日本社会に受け入れられていないと感じる留学生は相変わらず多い。これは高齢者問題や障害者問題とも共通したことでありと考える。区別・回避（隔離）されるか、お客様扱いかのどちらかで、同じ社会の一員として「共に生きる」ために助け助けられる関係が結ばれていない。

多文化共生は日本のみでなく、21世紀に向けての地球的な規模でのキーワードであろう。多文化社会の典型とも言える北米では、地域社会の活性化、共生を目指して、多数のボランティア団体の積極的な活動が展開されている。今後日本においても、ボランティア活動は共生社会に向けての重要なキーになると考える。多文化共生社会に向けて、ノーマライゼーションの視点から、外国人の地域社会への積極的な参加の促進と、その受け入れに対する具体的な方策、場の設定は急務であろう。

本研究では、その一方策として、留学生による地域でのボランティア活動を取り上げる。これは、現在地域で行われているボランティア活動へ、留学生が主体的に参加していくので、サービスラーニングのコンセプトを応用したものである。

本稿では、その実戦例として、長崎大学医学部附属病院でのボランティア活動について報告し、相互交流・協力を通して異なるものを認め理解し受け入れていく場、また、その過程を通して自己を発見し変容させていく場としてのボランティア活動の可能性を探り、その有効性について若干の考察を試みる。

1. 研究の背景

1-1 社会福祉的な視点から

留学生と日本人との相互理解を困難にしているのは、単に留学生の日本語力の問題というよりは、日本社会の持つ閉鎖性とその文化的差異が大きな要因となっているようである。

筆者は約15年間日本語教育に携わってきたが、学部の特長は社会福祉学であり、常に福祉的な視点から留学生問題をとらえてきた。特に高齢者や障害者が抱える問題と留学生が抱える問題の共通性に着目してきた。岩隈（1998）は障害者対健常者のコミュニケーションが典型的な「異人種・異民族コミュニケーション」と酷似していると指摘している（p.194）。岩隈はその具体例として、健常者が障害者と出会ったときの「緊張感」「気まずさ」あるいは「居心地の悪さ」、また「どう接していいかわからない」といった感情を挙げている。筆者は社会的な処遇面での共通性として、「区別（差別）」「隔離」「回避」および「特別視」が、また、交流の一般的な形態として、「イベント性」「一過性」が挙げられると思う。高齢者や障害者を施設に収容（隔離）し、年に数回特別な日に訪問、時にイベントへ招待し、常に「支援される側」として固定された枠組みの中に置く。「共生」の理念にはほど遠い現状である。もちろん、この状況は変化しつつある。

1-2 固定された枠組みの転換

「留学生」に対する支援を目的とした活動や、「留学生」との相互理解・交流を目的とした活動は、今後ますます促進されるであろうし、まさしく必要とされている活動であることは論をまたない。筆者自身、留学生と日本人学生の相互理解を促進するための方法として、日本語教育と異文化理解教育の統合を目指し、教室内外で双方の交流を計ってきた。¹⁾

2002年度から小学校から高校までの教育カリキュラムに総合学習が本格的に導入される予定であるが、そうになると、更に留学生を対象とした交流活動が活発化すると思われる。しかし、そうした交流には「留学生＝支援される側」、もしくは「留学生＝お客さま」「国際交流＝留学生」という固定された図式ができ上がってしまっている場合が多い。「ウチ」と「ソト」の概念がほぼ自動的に適用され、この図式の中では、留学生は常に「ソトの人」つまりアウトグループに分類されたままである。

学内外の留学生をサポートするグループや国際交流グループで、支援者の側に立って活動している留学生も増えてきているようであるが、筆者はこれに加え、国際交流の分野だけでなく、地域社会の中で、主体的に参加して行く場の必要性を感じていた。つまり、「ウチ」と「ソト」の枠組みを越えて、「留学生＝支援される側」「留学生＝お客さま」「国際交流＝留学生」という固定された図式を離れたところで、留学生が同等な立場で日本人と協力して活動する場が必要であると考えたのである。

現在地域で行われているボランティア活動に、留学生も同じ地域に住む住民の一人とし

て参加していくことが、従来の固定された枠組みを越える一つの方法となり得るのではないか。筆者はその有効性を検証していきたいと考えている。

1-3 本研究の特色

日本ではボランティア活動それ自体がまだ十分定着していない状態である。多くのボランティア活動が試行錯誤を重ねながら、参加者間の話し合いの中で、継続・発展していている。このような状況のもとではあるが、留学生と日本人が協力してボランティア活動を行う中で共に学び合う相互的な関わりが育っていくことが期待される。また、ここには異なるものを認め、受け入れていくプロセスも含まれるだろう。²⁾ これは留学生・日本人ボランティア・ボランティアを受ける側の3者が協同して自分たちの住む地域に多文化共生社会を形成していくということにほかならない。

一方、留学生は、ボランティア活動を通して、実践的な異文化コミュニケーション能力を向上させるとともに、支援する側の立場に立つことで、異文化の中で生活している自己に対してより自信を持つことができるようになると思われる。また、留学生にとって、地域でのボランティア活動は多様なバックグラウンドを持つ世代の異なる人達との交流を通じて、視野を広げるとともに新しいネットワークを構築していく機会ともなる。この新しいネットワークの中で、「外国人」ではなく、地域社会の一員としての自己を認識できるようになる可能性が開けるのではないかと思われる。

2. 留学生によるボランティア活動の事例

長崎大学医学部附属病院での活動は「入院病棟での患者さんのお世話」と「外国人の患者さんに対するお見舞いと通訳」の2種類であるが、本稿では前者について報告する。

筆者がボランティア活動参加の場として同病院を選んだ理由として、以下の点が挙げられる。

- ①病院自体が様々な世代を含有した一つのコミュニティを形成していること
- ②入院している人たちの生活が、ある意味で地域から隔離されていること
- ③組織自体が閉鎖的であるとされた医療の現場に、新しく積極的にボランティアを導入し、病院の社会性を追求しようという病院スタッフの姿勢が明確であったこと

2-1 ボランティア活動状況および経過

同病院は1997年7月にボランティアの導入を始めてから、病院の事務、医療スタッフが協力してボランティア活動を推進している。筆者は1997年秋に同病院がボランティアを導入したことを知り、上司にボランティアとして活動するための承諾を得た上で、1998年1月から3月までの3ヶ月間、週一回同病院の入院病棟でボランティア活動を行った。³⁾

同年4月以降はボランティアとしての活動は行っていないが、病院のボランティア担当婦長との連絡は継続して行っている。

留学生が、実際にボランティア活動に参加しはじめたのは、同年7月からである。1998年7月から現在までボランティア活動に参加を申し込んだ学生は5名。うち、実際に活動したのは4名である。⁴⁾ バングラデシュ、ブラジル、ナイジェリア、インドネシア⁵⁾ の4人（男性3名、女性1名）の留学生が入院病棟でボランティアとして活動した。

現在、実際にボランティア活動を行っている留学生は1名である。他の3名は、①留学を終え、帰国（ブラジル）、②出産のため入院中、③大学院入学にともない、研究に忙しく定期的な活動ができなくなった、といった理由で活動を中止ないしは休止している。

ボランティア募集方法としては、留学生センターの掲示板および留学生センターのホームページに掲載している。これに加え、『留学生センターニュース』にも活動の感想と募集案内を掲載した。

2-2 活動内容

同病院で一般に公募されているボランティア活動は以下の2種類である。

- ①外来でのお世話（受信手続の説明・代筆、診療科への案内、入院時の荷物の搬送等）
- ②病棟でのお世話（患者さんの話し相手、散歩の付添、食事時のお茶だし、小児患者さんへの本読み等）

留学生が行っているボランティア活動は、②の「病棟でのお世話」である。これは、①の「外来でのお世話」の場合、留学生の日本語力がかなり問題になってくると、ボランティア活動を通しての患者さんとの交流が一過性のもので、継続的な活動による人間関係の構築が難しいのではないかという筆者の判断による。留学生にはどちらの内容も説明したが、留学生自身が希望したのも②の方であった。

「病棟でのお世話」の内容であるが、実際に留学生が行った活動を、留学生が提出した「活動ノート」⁶⁾（資料1）、同病院のボランティアルームに置いてある「ボランティア連絡帳」⁷⁾（資料2）の記録、および、『留学生センターニュース』に掲載された活動の感想「なぜ病院ボランティアになったか」から拾ってみると、以下のようになる。

- a. 患者さんの話し相手
- b. 車イスでの散歩の付添
- c. リハビリテーション室等への付添
- d. 寝巻きの配布
- e. ごみ捨て
- f. 食事の介助
- g. マッサージ

- h. つめ切り
- i. 洗足
- j. 日本語が話せない外国人患者さんのための通訳（看護婦との会話）

3人の留学生についてはインタビューも行ったが、a. から g. までの活動は全員が行っており、特に a. の「患者さんの話し相手」は、相手の患者さんも楽しみにしているようである。⁸⁾

資料1⁹⁾

学生 a

98.8.21

Today it was holiday for me as the language course is off for two weeks. Only important job for me, to go to the Hospital at 1:30 PM to conduct my volunteer job.

As usual I reported to the Head Nurse Mrs. Kobayashi of my presence. I should must mention a little detail about her. She is very kind and always anxious to get some interesting job for me, so that I don't get bored regarding my volunteer job. Today her face seemed to be very bright than as usual. The reason is that she got some interesting job for me - talking with a foreign patient, Mr. Michel England. She (Mrs. Kobayashi) said to me that they are in a little problem with that patient as he can't communicate with them in Japanese. So she requested me to talk with him and inquire about his problem, I tried my best to translate his physical problem to the Nurse. Such as whether he had headache, Pain in Stomach, Problem in toilet matters etc.

Then after finishing the translation part, I started to talk with him on general aspects, without any specific topic. I came to know that, he is in one year research Program in faculty of Medicine, Nagasaki University. After talking on various aspects of life in Japan and others, its time for me to leave. So I asked him whether there is anything he wants, then he requested me to buy some drinks for him. I went out and bought drinks for him. Finally, leaving my address to him for communicating to me in case of any need, I left the hospital.

Yeah! It was a kind of successful volunteer day for me. I am satisfied about the achievement of the day. With my very poor and limited knowledge of Japanese, at least I was able to help one patient to communicate his physical status.

98. 10. 2

今日A、BとCさんという三人患者さんと初めて会いました。Cさんはごと島（五島）の住民で、私のような外国人と話すのは初めてと書いていました。二人歩いて、そして一人車いすにのせて病院の二かいに散歩しに行きました。二かいの庭でゆっくりいろいろな話をしました。三人とも外へ出るのはひさしぶりと言いました。そしてみんなの名前を覚える練習をして、十二かいへもどってわかれた。面白い一日だった。

98. 10. 8

Bさんを車いすにのせて 1 かいのリハビリテーションの部屋まで行きました。そしてあちらへ時間かかりますから、また十二かいへもどりました。あとでDという18さいの若い患者さんと会いました。Dさんは絵書くのは上手です。いっしょにすわってDさんの絵書のは見せてもらいました。とりの絵は好きみたい。三つぐらいとりの絵を書きました。でもこのとりの名前は何ですか？ 質問したら、Dさんにはにこにこしながら答えた「知らない」。いい想像力もっています。

98. 10. 15

今日最初十二かいの患者さんたちのねばけ（寝巻き）をいろいろな部屋にもってあげた。みんなのサイズがちがいますから、サイズあわせるのはむずかしいかった。でもみんなといっしょに会うチャンスができてうれしかった。

資料2 「ボランティア連絡帳」から

学生b

2000. 4. 4

はじめてボランティアするから、今日からもがんばりました。しかし、ときどき きんちよしました なんですけど、でも こんど きっと がんばります。

今日のでつだうことは、かんじゃさんに おはなししたり、ごみをすてました。

(原文はローマ字)

2000. 4. 25

- ・おとしよりのかんじゃさまに おたべさせて ほんとにたのしかった。
- ・おもしろいことを かんじゃさんにおはなししても よろこびました。

学生 c

2000. 4. 6

今日は、病院者とたくさん事をしたかったけれども、そういう機会がなかった。今度、がんばります！マッサージをしてあげて、よろこびました。

2000・4・21

話し相手とマッサージをしてよろこびました。

2000・5・19

いつも新しい友達できて、日本語の勉強もなってきました。嬉しい・・・

2000. 6. 2

今日は、足を洗って、首（つめ）を切って¹⁰、そして 話し相手した。とってもよろこびました。私もとっても嬉しかった。(^。^)

資料 3

学生 b

なぜ病院ボランティアになったか。

病院のボランティアの仕事は病気の人しか会わないので、一般的に他のボランティアの仕事に比べて、敬遠されるようです。でも、患者さんを手伝うことで、大きな満足が得られると思います。

約7ヶ月前、私は急に病気になりました。前はいつも元気でした。検査の結果、私は入院しなければならないと医者に言われて、びっくりしました。私は外国人ですから、入院の時に、何が必要か分かりませんでした。それに、長崎大学の病院から渡された病棟の規則等は全部漢字で書いてあります。これは、私にとって大問題でした。その時、ボランティアさんがわざわざ来て分からないところを私に教えてくれました。とてもうれしかったです。

入院してからも、ボランティアさんたちが、交代で毎日来てくれました。にこにこしながら、いろいろなことを手伝ってくれました。にこにこ優しいボランティアさんが来たら、心が暖かくなって、体の調子も良くなりました。寂しいときボランティアさんと一緒にお話ししたら、すぐ寂しくなくなりました。

私は退院したら、ボランティアをしようと思いました。退院してから2ヶ月後、体も元気になりましたので、ボランティアに申し込んで、4月から仕事を始めました。

実はボランティアの仕事はあまり大変ではありません。優しい気持ちがあれば大丈夫で

す。ボランティアの仕事は、患者さんをいろいろ手伝うことです。例えば、動けない患者さんにご飯を食べさせたり、マッサージをしてあげたりします。もし、患者さんがレントゲンや他の治療が必要なときは付き添って連れていきます。散歩の時、車イスを押しながら、いろいろなお話をしたりもします。

ボランティアをして、いろいろな経験をしました。うれしいことも一杯あります。お世話した患者さんから、「ありがとう、またお世話になります。」と言われたら、とてもうれしくなります。私も他の人を手伝うことができるし、役に立っているんだと思いました。患者さんに何回も会っているうちに、友達になることもあります。方言（長崎弁）にも慣れてきました。でも、私の日本語はあまり上手ではありませんから、お年寄りの患者さんの長崎弁がはっきりわからないこともあります。その時は、何回も聞いて理解するようにしています。そして、いつも喜びの気持ちを持って病院のボランティアの仕事をしています。

2-3 考察

留学生がボランティアとして活動している間、適宜、留学生とコンタクトをとり、活動の状況について話しを聞いてきた。これと上記資料から、留学生がボランティア活動を通して得たものとして、以下の点を挙げることができるだろう。

- ①現在の自分が誰かの役に立っているという実感
- ②日本語でのコミュニケーションに対する自信と実質的なコミュニケーション能力の向上
- ③信頼関係を伴った新しい人間関係の構築

筆者自身、同病院のボランティア活動を行って、患者さんとの信頼関係を作っていくことの難しさ、相手の要求していること、必要としていることを必要なときに提供することの難しさを実感している。病棟での患者さんとの実質的な関わりを持つボランティア活動が導入されてから、まだ日も浅く、ボランティアも、看護婦も、また何よりも患者さん自身がボランティアというものに慣れていない。お互いにどう接したらいいのか、戸惑いながら、試行錯誤の連続である。「ごみ捨て」といえども、ベッド脇のごみ箱を黙って持ち上げていくわけにはいかない。

その中で、留学生達は、患者さんの車イスを押しでの散歩、患者さんの身体に直接触れるマッサージやつめ切り、洗足までも行っている。一定の信頼関係なしにはできない行為である。

バングラデシュからの留学生は8ヶ月間活動を続けたが、はじめはなかなか心を開いてくれなかった患者さん達が、だんだん信頼してくれるようになり、いろいろなことを話してくれたとコメントしている。退院してからも手紙や電子メールをくれた患者さんもいた

ということである。また、ナイジェリアからの留学生にボランティア活動に参加した動機を尋ねたところ、「国ではいつも貧しい人たちが周りにいて、その人たちのために自分ができることをするのは当たり前のことであつたし、毎日の生活の中で何か人のためになることをするのが人間の努めであり、重要なことである。日本に来てからは、周りに援助を必要としている人は見当たらなかつたが、病院でのボランティア活動を知り、日本でも自分にできることがあるかなあと考えて参加することにした。」と答えた。この学生は病院のボランティアのほかに、ダウン症の子供たちとの交流会にもボランティアとしてたびたび参加している。

参加した留学生はブラジル人の学生を除き、一見ただけで外国人と分かる学生達である。日常生活の中で、偏見を持たれたり、差別を受けた経験もあるようである。また、ボランティアの記録からも分かるように、日本語のレベルは決して高いとは言えない。しかし、彼らは継続した活動の中で、意味のある感情のこもった会話をを行いながら、新たな人間関係を構築していつている。

3. まとめと今後の課題

病院でのボランティア活動に留学生が参加し始めて、約2年半が経過した。今後とも同病院でのボランティア活動を継続しながら、留学生が地域でのボランティア活動に参加する中で起きる問題、およびボランティア活動を通じた留学生と日本人が交流する中で起きる変化の過程を調査・分析していきたいと考えている。単発的な訪問客的参加ではなく継続的に責任ある仕事をボランティアとして行っていく中で、これまで表面化しなかつた問題点が浮かび上がってくる可能性もあるだろう。

また、今後、同病院以外にもボランティア活動の場を開拓し、留学生が地域の活動に参加できる機会を増やしていきたい。将来的には、ボランティア活動が、相互理解を深める契機となり、留学生にとっても日本人にとっても閉鎖性の低い多文化共生社会を形成する一助となることを期待している。

1) 松本他 (1998)、松本 (1999)

2) 筆者自身、学生時代から現在まで、様々なボランティア活動を通じて、異なるものを認め、受け入れていくプロセスを体験している。

3) 同病院のボランティア活動時間が平日の8:30から17:00に限られており、勤務時間帯であるため、活動のための了承を得る必要があつた。また、その時点では、筆者の業務もしくは研究として留学生のボランティア活動に結びつけることができるかどうか判断ができなかつたこともあり、ボランティア活動は昼休みをはさみ、年休を時間刻みでと

って、本務に支障のないようにするという条件のもとで開始することができた。

活動期間：平成10年1月15日から3月31日まで

毎週金曜日 12:00 - 13:30

- 4) 実際に活動に参加しなかった学生は、ボランティア活動開始直前に、不慮の事故により帰国を余儀なくされ、実際に活動することができなくなった。
- 5) この留学生は、現在は研究生をやめている。
- 6) ボランティア活動に参加している留学生に、研究の目的を説明したうえで、できれば病棟でのボランティア活動の内容とそれについてのコメントを提出してほしい旨を伝えた。
- 7) 同病院のボランティア室には、ボランティアの間の情報交換のために作られた「ボランティア連絡帳」が置いてある。これへの記入は義務ではないことと、日本語で書かなければならないことが重なって、留学生による記述は少なく、資料2. に挙げたものが全てである。全然記入しなかった留学生もいるが、これは日本人ボランティアにも言えることで、記入している人は限られているようである。
- 8) 担当婦長による。
- 9) 資料1. 2. とともに原文のまま手を加えていない。()内は筆者。
- 10) この記録を読んだ婦長さんが、びっくりして何をしたのかと、病棟へ駆け込んで患者さんに確認したという後日談がある。

参考文献

- 岩隈美穂 (1998) 「異文化コミュニケーション、マスコミュニケーション、そして障がい者」『現代思想』 vol. 26-2 pp. 192-203
- 江淵一公 (1991) 「在日留学生と異文化間教育-研究の視角と課題」『異文化間教育』 No. 5 pp. 4-20
- 堀正嗣 (1998) 『障害児教育とノーマライゼーション-「共に生きる」教育を求めて』 明石書店
- 松本久美子、安井澄江 (1998) 「初級コースにおける日本語教育と異文化理解教育の統合プログラム-教室活動とホームステイにおけるインターアクション」『名古屋大学日本語・日本文化論集』 第6号 pp. 161-192
- 松本久美子 (1999) 「留学生と日本人学生の初級会話合同クラス-双方向学習による異文化コミュニケーション能力の育成-」『長崎大学留学生センター紀要』 第7号 pp. 77-96
- THE BIG DUMMY'S GUIDE TO SERVICE-LEARNING: 27 Simple Answers to Good Questions on: Faculty, Programmatic, Student, Administrative, & Non-Profit Issues
<http://www.fiu.edu/time4chg/Library/bigdummy.html>